さらば星座

濁流の巻・下

黒岩重吾

さらば星座

濁流の巻

下

黒岩重吾

さらば星座　濁流の巻　下

一九七七年一〇月一〇日　初版印刷
一九七七年一〇月二五日　初版発行

定　価　七八〇円

著　者　黒岩重吾

装　丁　横手由男

発行者　堀内末男

発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
郵便番号　一〇一
電話　出版部（〇三）二二三〇―六三六一
　　販売部（〇三）二二三〇―六一七一
印刷所　大日本印刷株式会社
検印廃止
乱丁・落丁本はお取替えいたします

© 1977 J. KUROIWA　Printed in Japan

0093―772112―3041

日本音楽著作権協会承認第524611号

目

次

再会　九
故郷の不満　一六
決裂　二三
新しい女　二〇
恐喝者　二七
神戸の少年達　四四
山の中の物語　五一
悪寒の中で　五八
奇妙なドライブ　六五
明石の海　七二
酔いの中の顔　七九
重い箱　八六
摑んだ金　九三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

眠りながら歩く人　一〇〇
波の高い季節　一〇七
負けた理由　一二四
飛んだ子供　一三一
訊問　一三八
休養室の日々　一三五
獣の喚声　一四一
深夜の尾行者　一四八
大和魂　一五五
消えた友達　一六二
真昼の夢　一六九
卑劣な教師　一七六
嘘と真実　一八三

真の勇気　一九〇
春の家　一九七
女の匂い　二〇三
心の傷　二一〇
芽生えた欲望　二一七
嫌な訪問者　二二四
新世界の道　二三一
獣との再会　二三七
チェリーという女　二四四
華やかな宴　二五一
パーティの後で　二五八
新しい仕事　二六五
使者の役目　二七二

変心　二七九
夜の格闘　二八六
大きな嘘　二九三
自然の原野に　三〇〇

さらば星座　濁流の巻　下

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

再　会

1

店を休んだ夜、加津子は、和歌山に帰るべく荷物の整理を始めた。正明は、それを手伝った。加津子は、正明に自分と一緒に来てくれるよう頼んだ。

加津子は、正明を実の弟のように思い始めているのだ。だが正明は違う。正明は加津子に、異性の匂いを嗅いでいた。

今のところ、加津子はそれに気付いていないが、何時か気付くだろう。

その日を想像すると、正明は顔が赧らむのだ。自分でも、この感情は理解出来ない。

街をさすらう浮浪児達は、卑猥な言葉を平気で使う。卑猥な言葉を使っているうち、男と女の関係は卑猥なものだ、と感じるようになっていた。

勿論そこには未知の世界への好奇心が溢れている。公衆便所の落書きに対する好奇心であった。ところが、加津子に対する正明の性の芽生えは、落書きとは何処か異質であった。落書きを見ると、笑ったり、自分のものを引き出して、放尿したりする。

また早く卑猥な世界に入りたい、と思う。つまりいきりたつが、そこには顔を赧らめるような羞恥心がなかった。街で見掛けるセックスには、羞恥心が全くない。

何時か正明は、娼婦が男に襲われた光景を目撃したことがあった。あの時は、復讐のために娼婦を追いかけていたのだが、羞恥心など全くなかった。

ところが、加津子の身体を想像すると、羞恥心が湧くのだ。正明はその羞恥心に狼狽した。正明達の仲間に、自分と同じような羞恥心を、女性に対して抱いた者が居るだろうか。どうも居ないようだ。

三田はまだまだ子供なので、性に対する好奇心は持っていなかった。

三田も卑猥な言葉を口にするが、それは好奇心ではなく、仲間達の通用語として、口にしているに過ぎない。

「ねえ正ちゃん、兎に角、和歌山まで行ってくれない、私一人だと、荷物を持ち切れないから」

と加津子は汗を拭きながらいった。

加津子には、色々と世話になった。大阪に来て、こん

な気楽な生活が出来たのも、加津子のおかげである。
「荷物ぐらい持つよ」
と正明はいった。
翌日、加津子と正明は阪和線で和歌山に行った。和歌山もかなり焼けている。
紀の川の傍だ、といっていたが、加津子の家があった場所は少し離れていた。
和歌山城の近くである。
ここにも運不運があった。焼野ケ原に、取り残されたように焼けていない場所がある。だが、家は古く、玄関の傍には剝げて赤茶けた格子がついている。
加津子が居た家の傍には寺が多かった。
二人は歩いて、そこまで来たのだ。
「あら、バラックが建っているわ」
加津子が驚いたようにいった。
つまり加津子の家の焼跡に、トタン葺きのバラックが建っているのだった。
「ここはお姐ちゃんの土地やろ?」
と正明は訊いた。
「ええそうよ、狭いけど、お父ちゃんの土地よ」
「他人の土地に黙ってバラック建てやがって、お姐ちゃん、心配せんでええ、交渉して、立ち退けへんかったら、火をつけてやる」
正明は眼を釣り上げた。
正明の家は借家だったから、土地は父のものではない。土地を持っている家主が、新しい家を建てようと、正明は文句をいえない。
「そんな無茶なことをしないでも大丈夫よ、私がちゃんと交渉するから」
加津子は強い口調でいった。
別人のような強さで、そこに正明は、加納の女であった加津子の芯の強さを感じたのだ。バラックの中には、若い女性が居た。
化粧もせず、健康そうなまるで漁師の娘のような女であった。彼女は日本手拭で頬被りして、なかを掃除していたが、訪れた加津子と正明を不思議そうに迎えた。
「失礼ですけど、ここには誰が居られるんですか?」
加津子は、丁寧な言葉の中にも、強い意志を込めていった。
「あなたは?」
その女性は手拭を取っていった。
「私、ここの家に住んでいた中川です」
「まあ、加津子さん、加津子さんでしょう」
女は嬉しそうに眼を光らせた。

「あなたは？」
と加津子は吃驚したようにいった。
「中川の家内です、中川から加津子さんのことは聞いていました、連絡がないので、中川も心配していましたわ、でも良かった、あら、どうぞお入り下さい、二人で建てたので、狭い部屋ですけど」
「じゃ、兄は復員したの、知らなかったわ、何時なの」
「去年の冬です、丁度電車の中で一緒になって、さあ、どうぞお入り下さい、坊ちゃんもどうぞ」
中川の細君は正明に笑顔を向けた。
「正ちゃん、兎に角、入りましょう、おなか空いたでしょう」
加津子と正明はバラックの中に入った。
狭い部屋に色々なものが置かれているが、綺麗に整頓されている。中川の細君は時子という名前だった。きっちりした性格なのだろう。
正明は、加津子の兄が帰国しているのを知り、良かった、と思った。これで、加津子も、再び大阪に出て来て、サロンなどに勤めなくても済むだろう。
「これ、おみやげ」
そういって、加津子が差し出した米を見て、時子は、信じられないものを見たように眼を見張った。
「そんな、こんな大切なもの」
「良いのよ、当分、困らないだけのものは用意して来たから」
正明は時子に場所を教わり、一人で紀の川の堤防に行った。東の方は山々で、遠くに高い山脈が霞んで見えた。
堤防の下で、釣りをしている人が多い。正明は淀川で鮒を釣った時のことを思い出した。釣道具を持って来たら良かった、と正明は残念だった。沢山魚が釣れそうな気がする。正明は大きく深呼吸した。
陽は丁度頭の真上にあった。
これで再び自由な身になる。
また飢えに苦しまなくてはならないだろう。
食べ盛りの年齢だ。だが飢えと収容所を較べると、正明は矢張り飢えの方を取るだろう。何年か先は分らないが、今の正明にとっては、自由が最も大切だった。
正明は陽が西の海に落ち始めるまで、紀の川の堤防の上に坐っていた。
「正明ちゃん」
何処かで自分を呼ぶ加津子の声がした。
正明は本能的に堤防の草叢の中に身を隠した。だが、堤防の上に立って必死に自分の名を呼んでいる加津子を

見ると、矢張りこのまま何もいわずに、加津子と別れるのは辛かった。
正明が身を起し堤防に立つと、加津子と見知らぬ男が立っていた。
加津子の兄だろう。
「吃驚したわ、正ちゃんの姿が見えないので、正ちゃん、紹介するわ、私の兄よ」
加津子の兄は、背は低いが肩幅が広く立派な体格をしていた。菜葉服を着ている。
正明は近寄ると加津子の兄に頭を下げた。
「今日は、春日正明です」
「いやあ、礼儀正しいなあ、加津子が世話になったそうだな、有難う」
「いいえ、僕の方が、お世話になりました」
と正明はいった。
「正明ちゃん、兄さんね、魚をとって来たのよ、そりゃ、新しいお魚よ」
「へえ、小父さん漁師ですか?」
正明は眼を輝かした。
「いや、漁師じゃないが、女房が漁師の娘なんだ、それで、女房に教えて貰って海に魚を釣りに行く、沢山釣れるぞ」
「僕も魚釣りは好きです」
「そうか、それは良かった、じゃ、明日一緒に行こう、その代り、朝起きるのは早いぞ、四時頃じゃ」
「三時でも四時でも平気です、海で魚を釣るなんて、素晴らしいな」
正明の胸が躍った。

2

加津子の兄は魚を釣り、それを売って生活しているらしかった。その当時、新しい魚は米と同じように人々の口に入り難かった。今朝、釣ったばかりの魚は身が引き締り、実に旨い。正明は何年かぶりで魚の刺身を食べることが出来た。
加津子の兄は、敷地内にもう一軒バラックを建てるから、加津子と一緒に住んだら良い、という。浮浪児とは思えないほど礼儀正しい正明を、気に入ったようだった。
正明は、加津子と一緒に、残した加津子の荷物を取りに大阪に戻り、そのまま別れる積りだったが、魚釣りの魅力に憑かれて、二、三日、加津子の兄の家に泊ることにした。

時子の実家が漁師なので魚釣りの道具や小船もあった。
船といっても淀川の堤防につないであったような小さな木の船である。
その夜、加津子の兄は正明に、魚を釣る要領を教えてくれた。てぐすに錘をつけ、釣針に干して刻んだハゲや鯖の皮をつけてある。
その皮は小さい魚のような形をしていた。
「こんなもので、釣れるんですか？」
「ああ、鰺や鯖が釣れるんじゃ、このハゲの皮は海に沈めると白魚が泳いでいるように見える、鰺や鯖の大好物じゃよ、沢山釣れるから売れる」
加津子の兄は詳しく釣り方を説明してくれた。
四人並んで眠ると狭い部屋は一杯になる。
今夜の正明には、加津子に対して、昨夜のような気持は起らなかった。
それは、加津子の兄や時子が一緒のせいだろう。
加津子の兄と加津子が話し合っている間に、正明は眠ってしまった。
正明は魚を釣っている夢を見た。何の魚か知れないが、大きな魚らしく凄く重い。
正明の力では、なかなか引きあげられない。だが、釣っているのは正明一人だった。
正明は、何が何でも釣りあげなければならない、と思った。
病院では痩せ衰えた母が、正明が釣って来る魚を待っているのだ。その母に、大きな新しい魚を食べさせたい。
こん畜生、こん畜生、と叫びながら、てぐすをたぐった。やっと魚の姿が見えた。
一米近い魚である。
「よっしゃ！」
と叫んで正明がてぐすを持ちあげた途端、大魚は正明を嘲笑するようにてぐすを切り、銀色に光る腹を見せながら海の中に消えてしまった。
悔しさに正明は眼を醒した。
まだ夜が明けないのに、時子と加津子の兄が、釣道具の用意をしていた。
「起きたか、今、起そうと思っていたところじゃよ」
加津子は熟睡していた。
正明は加津子の兄に連れられて浜辺に行った。漸く東の空が白み始めていたが、海は墨を流したように黒い。夜が明けかけているので、海の色が余計黒く見えるのかもしれない。

海は想像していたよりも静かだった。
「この船で一粁ぐらい沖に出る、恐くはないか」
加津子の兄は櫓を漕ぎながらいった。
「恐くありません」
正明は早く魚を釣りたい、とそればかり思っていた。
二十分ほどたったろうか。
東の空がかなり明るくなり、海の色が薄墨色に見えて来た。少し波が出始め、小船が揺れる。右手の方に大きな島が薄闇をえぐり取ったように黒く浮いていた。
「あれが友ケ島じゃよ、あの近くで釣れる」
そういわれれば、同じような小船が友ケ島の方に向っていた。
釣場に来た時は、紀伊山脈の上に朱色の輝きが見え、空を覆う雲は銀色で、海は暗緑色に変っていた。紀伊水道の中央の辺りが白銀のように煌いている。
「美しいなあ」
と正明はいった。
「酔わないか、慣れないと、船酔いをするぞ、だが、君がいくら船酔いをしても、船を戻すことは出来んぞ」
「分っています、昨日聞きました」
と正明は張り切っていった。
そのことは、くどいほど加津子の兄にいわれたのだ。
船を止ると、何故か揺れが強く感じられ、少し頭がふらふらし出した。
「魚を釣る道具を貸して下さい」
正明は少し不安を覚えた。
加津子の兄が教えてくれたように、てぐすを海の中に垂らした。赤い紐で印をつけたところまで下ろせ、といわれた。
錘のせいで、てぐすは勢い良く海の中に沈んで行く。どのぐらいの長さか分らないが、赤い紐が目についたので、てぐすを止めた。
頭のふらつきが、胸の中にまでゆっくり拡がって来た。
負けるか、船酔いぐらいに負けるか、と正明は胸の中で叫んだ。
「よし来た」
そういうと加津子の兄はてぐすをたぐり始めた。素晴らしい早さである。
「釣れましたか?」
「ああ鯖じゃ」
加津子の兄は、まだ魚を見ないのにいった。二十糎ぐらいの鯖が二匹、釣針に喰いついていた。
加津子の兄は、釣った魚を船から海中に垂らした網の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com